
想桜

葵夢幻

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

想桜

【Zコード】

N1209D

【作者名】

葵夢幻

【あらすじ】

突然のメールで呼び出された俺は必死になつてその場所を目指していた。そしてその場所に待っていたのは……想い

生暖かい空気が通り過ぎていいく中で、俺は必死になつて自転車をこいでいた。

「くそつ、いつたい何だつてんだよ」

さつきから汗がダラダラと止まらず、足が棒のようだ。うん、この言葉は今の状態の事なんだな。つて、何考えてんださつきから俺は。

「こうなったのも全部あいつの所為だ」

俺が必死になつてている先程の原因を思い出しながら、会つたらどう仕返ししてやうつかと考えを廻らす。

それは少し前、俺が部屋でくつろいでいる時だった。突然携帯電話がメールの着信を知らせた。

めんどうさいから後でも良いかと思ひながらも、俺はメールを開き驚いた

『ごめんね、いきなりメール送つて。でも、どうしても会いたくて話がしたいの、私の事許してくれるなら。もし、会つてくれるなら丘の上にある一本桜で待つてるから。可織』

そのメールを見て俺は手早く身支度を整えると自転車へと飛び乗

り、夜道へと走り出した。

可織は昔からの幼馴染で中学の時から付き合つていた恋人だ。

思春期真っ只中にも俺達の関係は変わることなく、それどころか恋愛関係まで進んでしまつた。

まるでギャルゲーの設定だな、とよく言われるが俺達はそんなこと気にすることなく、付き合い続けて高校に入つても変わることは

無かつた。

少し前までは……。

突然可織の父親が転勤することになり、それに伴ない可織の転校も決まった。

可織は猛反発して一人暮らししますと云つて残ることを両親に告げたが、そんなわがままが通るわけもなく、経済的にも余裕が無い可織の家は一家揃つて引越しする事となつた。

俺達が別れる事が決まった瞬間だ。

可織の引越し先はとても遠く、とても日帰りが出来る距離ではない。もし会おうとしたなら一泊しないと帰つてはこれない。高校生である俺にそんな経済力がある訳も無く、俺達の距離は次第に遠のいていった。

そしてとうとう俺達は連絡を取り合つことをしなくなつた。学校で会つても挨拶程度しか話はしない、当然昼飯も別々に食つている。そんな折に突然来たメールが、俺の中にある押さえ切れない衝動を突き動かした。

そんなワケで俺は必死に自転車をこいでいた。しかも上り坂。

だつ！何で待ち合わせが丘の上なんだよ。しかも今はお花見シーズンで周りがうつとうしい。そんな中で必死に自転車をこいでるこいつの身にもなりやがれ。

桜並木である宴会会場を横目に見ながらも俺は丘の上を目指して自転車をこぎ続ける。

桜並木を抜けると周りの木々は杉やヒノキなどの木に変わり、人通りもすっかり無くなつた。この先にある桜は一本だけ、丘の頂上

にある一本桜だけだ。丘の上にポツンと一本だけ桜の木が生えていることから一本桜と呼ばれてるらしいが、今の俺には関係無い、とにかくそこに行くだけだ。

やつとの思いで俺は丘の頂上に辿り着くと自転車を降りて息を整える。そして見た物は見事に満開の桜だ。

人は誰もおらず、下の宴会会場からの明かりで照らされている桜はとても神秘的で、俺はしばらく桜に見入ってしまった。

……んつ、さつさつき俺なんて思った。確かに……人が誰もいなって。俺は自転車を放り出して桜の元へと駆け出した。そして桜の下には……誰もいなかつた。

「ははっ、なんだよ、それ

もう笑うしかなかつた。必死になつてここまで来たのに誰もいないなんて、どんな冗談だよ。

桜に背を預けるように座り込み、上に咲き誇つている桜を見上げる。

疲れきっているのか、こいつこいつしているととても気持ちよく、疲労感が取れるようだつた。

「本当、綺麗だよな」

下の宴会会場からライトアップされる桜はとても綺麗で、この世の物とは思えないぐらい綺麗だつた。

神秘的に綺麗な桜を見ながら俺が思い出したのは可織の事だつた。結局、なんだつたんだよ。もしかしたらと俺は少し期待してたのに、なんでいないんだよ。俺達別にお互いが嫌になつて別れた訳じやないんだぞ。

俺は俯きひざを抱える。別に誰かに見られている訳ではないが、泣いてるところをさらすのが嫌だつた。

「可織」

呴いた言葉に反応するよつて、急に後ろが明るくなり振り向く。

桜が少しだけ……本当に少しだけ輝いていた。

その輝きはとても暖かく優しく感じられた。

だからなのか俺は恐る恐る桜に手を近づける。別に害があるものではないような気がしたから。

そして俺は桜に手を付いた。

『やつぱり来ないか、仕方ないよね。最後に言いたい事が有ったんだけどな。私も今でも君の事が好きだよ。でも、お別れだね。今まで楽しかったよ、ありがとう』

『忘れないよ、どんなに時間が経つても……』

それは確かに可織の声だった。桜から可織の声が聞こえた。ちょっと待て、何だ今は何で桜から……そりいえば、昔ばあちやんが変なことを言つてた気がする。

えっと確か「桜には人の想いが宿ってるんだよ。だからこんなに綺麗なんだよ」かな。まあいい、もしそうだとするとそれが可織の想い。

可織が伝えたいことって、これなのか？

桜の輝きはいつの間にか消えており、下からは宴会会場の騒音が流れてくる。

だからいいよな。誰も見てないし聞いてないから。

俺は桜にすがりながら思いつきり泣いた。

翌日、いつもと同じ登校風景、何一つ変わったことは無い。そんな中を俺も歩いている。それは教室に入つても同じだ。いつもと同じように皆が騒いでおり、チャイムが生徒たちが自分たちの席に戻つていく。

そして担任が入つてくるとホームルームが始まり、まず最初に可織の転校を告げた。

(後書き)

えへ、そんな訳で……どんな訳。まあ、いろいろあるんですねよ
これが。さて、それはさて置いといて。

この作品はかなり前に書いたものなんですが、久しぶりにこの
中を見たらあつたので掘り出して見ました。

なんていうかな、なんで俺の恋愛物つて別れる場合が多いんだろ。
友人いわく、それは私の恋愛が成就した事が無いかららしい……悪
かつたな——！　ああそうですよ私に彼女なんていませんよ！
結婚、そんなことはまったく縁がありませんよ、ええ、そうですと
も。……はい、一応キレてみました。特に意味はありません。

ではでは、この作品を呼んでくださいありがとうございました。
そして他の作品もよろしくお願ひします。更に評価感想もお待ちし
ております。

以上、恋愛とは縁遠い葵夢幻でした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1209d/>

想桜

2010年10月8日15時19分発行